東京都市大学共通教育部紀要　抜刷　2018 Vol.11

A Study on the Life and Works of Ohgi Rodou (2)

建築家仰木魯堂の生涯とその作品について(2)
－新出資料とともに

岡山 理香

Journal of Liberal Arts and Sciences at Tokyo City University Vol.11, 2018

建築家仰木魯堂の生涯とその作品について（２）
― 新出資料とともに

人文･社会科学系　人文･社会科学教育部門　　岡山 理香

はじめに

大正から昭和にかけての近代数寄屋建築の形成において大きな役割を果たした仰木魯堂（本名：敬一郎　1863 年～1941 年　以下、魯堂）の生涯について前稿（2017 年）*1 で考察し、いくつかの新たな知見を得た。そのさい文中に魯堂の肖像写真として【図１】（写真①）をあげた。これは、魯堂の高弟であった藤井喜三郎氏の『艸居庵記』*2 の口絵になっているもので、出版物などで魯堂紹介の折に必ずと言ってよいほど登場するものである。痩身を和服に包み、座敷に端坐し香を聞くこの姿が、仰木魯堂という人物の印象を決定づけていると言ってよいであろう。

その他に魯堂の写っている写真として出版されているものは、高橋義雄『茶道本山記』*3 に掲載されている【図２】（写真②）である。自身が設計を手がけた音羽護国寺の不老門の前で、高橋箒庵らとともに写っている。ここに写る魯堂は、洋装にして恰幅のよい紳士である。晩年と壮麗期の姿をこの２点に見ることができる。

そして、もう１点新たな写真【図３】（写真③）を本稿にて取り上げたい。昭和初年に撮影されたとされる魯堂の家族写真である。魯堂の実弟源太郎（次男 1867～1932）の孫である仰木元二氏より提供いただいたもので、本稿にて初めて公開する。ここに魯堂の肖像写真として、3 種類のものが揃ったことになる。（写真①：単独肖像写真　写真②：仕事関係者との集合写真　写真③：家族写真）

魯堂の人物像は、実弟仰木政吉（号：政斎、有望　1879～1959）、高橋義雄（号：箒庵　1861～1937）らの記述による文献資料に描写されているが、肖像写真を検討することによって、よりいっそうその輪郭が明確になってくるであろう。

図１　写真①
仰木魯堂肖像写真
「蘭奢待（らんじゃたい）を聞かれる仰木魯堂先生。床の経巻は、原三渓氏が仰木先生のために写経して贈られた観音経。経巻の製作は田中親美氏。（葉山市、山ノ別荘の広間）」藤井喜三郎著『艸居庵記』昭和 45 年（1970）

図２　写真②
音羽護国寺不老門集合写真
高橋箒庵著『茶道本山記』昭和 13 年（1938）

図３　写真③
仰木家写真
（仰木元二氏所蔵）

本論は、この3点の写真のうち、特に写真①の内容を精査し、魯堂晩年の様子と作品について考察したい。

また、写真①を分析する過程においてこれまで明らかになっていなかった魯堂の葉山の2件の別荘について、その成立の経緯を明らかにする。さらに、遺作となった葉山「山ノ別荘」の竣工年は、これまで昭和14年（1939）とされていたが文献的根拠によって昭和15年（1940）であることを述べたい。

1.　写真資料の概要

3点の肖像写真の内容を検討するため、写真①～③の概要（撮影者、撮影場所、撮影時期）を記す。

写真①：魯堂の肖像写真として出版物などで最も使用されているのが写真①【図１】である。これは、仰木魯堂の高弟であった藤井喜三郎氏によって書かれ昭和55年（1970）に出版された『艸居庵記』*4 の口絵を転載したものである。今回の調査によりこの写真の初出は、昭和16年（1931）発行の雑誌『日本之茶道』*5 であることが判明した。撮影者は、藤井喜三郎自身である。*6 撮影場所は、口絵の説明に「山ノ別荘」とある。時期については不明である。本稿では、撮影場所である「山ノ別荘」及び撮影時期の特定を試みたい。

写真②：高橋義雄著『茶道本山記』昭和13年（1938）発行*7 の「不老門の建立」と題された一文中に図版として掲載されている。撮影者は、不明。撮影場所は、音羽護国寺（東京都文京区）の不老門前である。撮影時期は、不老門が完成した年であると推定される。不老門を実現するにあたって尽力した人物達と護国寺の僧侶達が写っている。中央に高橋義雄、その右に寄進者の三尾邦三、設計した仰木魯堂。左に護国寺佐々木貫首。左端に田中親美、道具商山澄力蔵であることが図版の説明より判明している。その他、魯堂の隣に3人の洋装の男性が写っている。長身で髭をたくわえた人物は、魯堂の次男仰木茂（1904～1982）、右端二人のうち一人は、仰木魯堂建築事務所の所員川面萬吉と推測される。

写真③：平成 29 年（2017）12 月 1 日、魯堂の実弟仰木源太郎の孫である仰木元二氏（1921 年生まれ）に聞き取り調査を行ったさいに提供された写真である。本稿にて、初めて公開するものである。原版を複写したもので、白黒、縦 101㎜×横 152㎜である。撮影者、撮影場所、撮影時期は、不明である。写っているのは、左より、四男仰木政斎、次男仰木源太郎、長男仰木魯堂、魯堂夫人、仰木マツ（政斎夫人）である。

次章よりこの写真③について検討したのち、写真①に基づいて、その撮影場所より魯堂の葉山における 2 軒の別荘、撮影時期から魯堂の最晩年についての考察を試みたい。

2.　新出資料　写真③について

前述のように写真③は、平成 29 年（2017）12 月 1 日に、仰木魯堂の弟仰木源太郎の孫である仰木元二氏に横浜市において聞き取り調査を行ったさいに提供されたものである。この聞き取り調査は、福岡県中間市における「中間市制 60 周年記念特別展　近代数寄者仰木魯堂と仰木政斎（仮称）」の事前調査の一環として行われた。取材者は、中間市教育委員会吉田浩之氏、なかまハーモニーホール館長浦塚省二氏と稿者である。

写っているのは、左より仰木政吉（政斎）、仰木源太郎、仰木敬一郎（魯堂）、仰木敬一郎夫人、仰木政斎夫人マツである。座敷で盆栽を手前に全員揃って正装で写っている様子から、何かの記念撮影と考えられる。所蔵者の仰木元二氏によると撮影時期は、源太郎が一時帰国した昭和初年頃、とのことである。それに従い、撮影時期を昭和元年（1926）として計算した場合、それぞれの年齢は、魯堂 63 歳、源太郎 59 歳、魯堂夫人は、再々婚した美代と考えられ 32 歳、政斎 47 歳、マツ 45 歳となる。

しかしながら、左端に写るのは、写真④【図 4 】と照合して政吉であると断定することができるが、ここに写る姿は 40 歳代には見えない。

そうすると源太郎が日本にいる時期に撮影されたと考えるならば、最も可能性が高いのは、魯堂が下関より上京し、源太郎が朝鮮へ渡る明治 38 年（1905）頃と推測される。その推測に基づけば、魯堂夫人は、再婚したタネとなり、それぞ

図４　写真④
仰木政斎肖像写真
仰木政斎著『雲中庵茶会記　戦前・戦中』
平成９年（1997）

れの年齢は、魯堂 42 歳、源太郎 38 歳、魯堂夫人タネ 29 歳、政斎 26 歳、マツ 24 歳となる。また、撮影時期が明治 40 年代であれば、魯堂夫人は、仰木エイとなる。

本稿においては、写真③の撮影時期を特定できないため、魯堂夫人が誰であるのかを特定できないが、仰木元二氏より稿者に提供された戸籍謄本*8 及び元二氏の平成 26 年（2014）8 月 8 日付け書面に基づいて、源太郎、3 人の魯堂夫人（タネ、エイ、美代）、マツの 3 人の履歴について述べてゆく。

仰木源太郎：慶応 3 年（1867）～昭和 7 年（1932）仰木久兵衛、ムラの次男として筑前国遠賀郡中間村（現福岡県中間市）に生まれる。シンと結婚し、養子健一郎（1891～1959）を迎える。健一郎は、ヨシ（1900～1994）と結婚しその次男が仰木元二氏である。

源太郎は、魯堂が上京した年と同じ明治 38 年（1905）に朝鮮に渡り、馬山港で汽船の回漕店を経営していた。大正元年（1926）に鎮海湾に面した巨済島の城浦港に移り、回漕店を経営。同島に政斎の長男誠一、昌子、高子が来て長期滞在した。昭和 6 年（1931）、源太郎危篤の電報に急遽、魯堂夫妻が来島。その後、政斎も来島。この時、元二氏は魯堂夫妻に会っている。源太郎は、魯堂や政斎同様、手先が器用であった。三味線を弾き、浄瑠璃を語り、家具なども自作していた。

仰木タネ：津田タネ　明治 9 年（1876）～明治 40 年（1907）津田光吉の次女として山口県赤間市に生まれる。魯堂が唐津より下関へ移住した明治 29 年（1896）6 月に結婚。二男一女をもうける。長男政人：明治 31 年（1898）～大

正8年（1919）、次男茂：明治37年（1904）～昭和57年（1982）、長女ヨシ子：明治40年（1907）～明治43年（1910）を生んだのち31歳の若さで亡くなる。

仰木エイ：三浦エイ　明治12年（1879）～不詳　三浦トクの娘として東京市京橋区南鞘町に生まれる。魯堂は、エイと明治43年（1910）8月に再婚し、大正9年（1920）に協議離婚している。エイは「栄子」と表記されていることがある。

仰木美代：川面美代　明治27年（1894）～昭和60年（1985）魯堂が大正11年（1922）に再々婚した人物である。川面太七、はるの夫妻の長女として東京市京橋区惣十郎町に生まれ、赤坂で芸妓をしていた。茶人として大日本茶道学会田中仙樵の門下であり、号を美仙、美樵という。魯堂とともにあるいは単独で数々の茶会に招かれていることが『雲中庵茶会記』*9『昭和茶道記』*10 などに記されている。また、團琢磨夫妻に茶の湯の点前を教授した。*11 料理もよくし、原宿穏田の本邸で耳庵が魯堂の見舞いに持参した川鱒と手料理を振る舞う様子が『雲中庵茶会記』*12 に記されている。源太郎危篤の報を受けて朝鮮に魯堂とともに来訪した美代に会った元二氏によると「大変美しく、気遣いのあるきっぷの良い人」であったとのことである。

仰木マツ：室谷マツ　明治14年（1881）～昭和38年（1963）室谷安次郎の三女として山口県阿武郡萩町に生まれる。明治32年（1899）9月下関における魯堂の工房で指物師として雇用されていた仰木政吉と結婚。三男四女をもうける。茶人として政斎とともに数々の茶席に入っていることが『雲中庵茶会記』*13、松永安左エ門『茶道三年』*14 などに記されている。雲中庵での茶会では、料理を担当し、客人たちに賞賛されている。特に昭和16年（1941）10月の魯堂忌での割烹を絶賛されている。*15 政斎夫妻は、大正12年（1923）に魯堂が手がけ所有していた広尾祥雲寺境内茶室「雲中庵」（現重要文化財）を購入し、住まいとした。戦中は、松永耳庵の柳瀬山荘春草庵（現東京国立博物館内　春草盧）へ疎開していたが昭和23年（1948）に広尾へ戻り、マツは、昭和38年（1963）に生涯を閉じた。

この時期の魯堂は、益田孝（号：鈍翁　1848～1938）をはじめとする近代数

寄者の間で、建築家としての知名度が高まっているさなかであった。特に團琢磨（号：狸山　1858～1932）、高橋箒庵は、建築家、茶人としての魯堂を頼みとしていた。写真②は、高橋箒庵が東都の茶の本山とすべく魯堂に普請のいっさいを任せて音羽護国寺を整備していた頃のものである。*16

明治末に上京し、20年ほどで名だたる近代数寄者の邸宅や茶室を多くの職人たちを率いて実現させた、仰木建築事務所の所長としての堂々たる姿である。そして、家族とともに写る写真③には、精力的な活動を支えた気骨ある表情を見ることができる。亡くなる直前まで建築に携わり続けた魯堂の、その最後の姿を撮影したものが写真①である。この写真①の撮影場所、撮影時期に基づいた論考を次章より行ってゆきたい。

3.　撮影場所　草庵「魯堂」と「山ノ別荘」

（１）写真①の撮影場所

『艸居庵記』に掲載されている写真①の説明書として「蘭奢待（らんじゃたい）を聞かれる仰木魯堂先生。床の経巻は、原三渓氏が仰木先生のために写経して贈られた観音経。経巻の製作は田中親美氏。（葉山市、山ノ別荘の広間）」とある。

これより、撮影場所が「山ノ別荘の広間」であることがわかる。「山ノ別荘」とは、神奈川県三浦郡葉山町にある魯堂の別荘のことである。

さらに『艸居庵記』には、もう１枚魯堂が写っている写真が口絵にある。（写真⑤【図５】）この説明書に「原家からお見舞に届けられた三渓園の蓮の花を田中親美氏と共にめでられる病床の仰木魯堂先生。かたわらの経巻は原三渓氏より贈られた観音経。（葉山市、森戸の草庵）」とある。これより、撮影場所が「森戸の草庵」であることがわかる。

つまり、この二枚の写真が撮られた時期に、魯堂は葉山に少なくとも２軒の別荘を持っていたということになる。「山ノ別荘」は、昭和14年（1939）に竣工したとされているが*17、「森戸の草庵」の成立年はこれまで明らかになっていない。そこで、この２軒はどちらが先に建てられたのか、２軒の成立順序について考証する。

（２）　草庵「魯堂」

結果から述べれば、葉山において最初に設けられた別荘が「森戸の草庵」であ

図５　写真⑤
魯堂と田中親美
「原家からお見舞に届けられた三渓園の蓮の花を田中親美氏と共にめでられる病床の仰木魯堂先生。かたわらの経巻は原三渓氏より贈られた観音経。（葉山市、森戸の草庵）」藤井喜三郎著『艸居庵記』昭和45年（1970）

り、次に建てられたのが「山ノ別荘」である。

神奈川県葉山町一帯には、明治20年代より別荘、別邸が造営され始めた。明治22年（1889）には、葉山町一色に文部大臣も務めた子爵井上毅（1844～1895）が別荘を営み、その親友であった司法大臣を務めた伯爵金子堅太郎（1853～1942）も続いた。[*18] 團琢磨は、義兄である金子の勧めで明治31年（1898）頃に「葉山町字一色の三岡山麓」相模灘の向こうに富士山を望む高台に別荘を設けた。[*19] この團家の別荘近くに魯堂は、別荘を自ら手がけたのである。

魯堂は、上京後、杉孫七郎（号：聴雨　1835～1920）の紹介によって同郷の團琢磨と知己を得ており、大正2年（1913）には、團家の茶室を手がけている。後年、魯堂は、本宅を團琢磨の東京府豊多摩郡千駄ヶ谷村字原宿の本宅近くに構え、「団家の普請奉行」[*20] と呼ばれるほどの信頼関係を築いている。魯堂は、團琢磨に勧められて葉山に草庵を結んだと考えてよいであろう。藤井氏も「団家の別荘が葉山にいとなまれていたことから、仰木家も葉山を選ばれたものと思われます。」[*21] と述べている。

関東大震災被災直後、魯堂は、葉山の草庵に集まっていた人々とともに團家の別荘に駆けつけている。この逸話が葉山の草庵に関する『大正茶道記』における

最初の記述である。「竹有庵名残　大正十三年九月二十二日」[*22] と題した文章の中で、大正 12 年（1923）9 月 1 日関東大震災当日に「（竹内竹有）氏は茶友四、五名と仰木魯堂の相州葉山の茶寮に参会した処（下線稿者）」とある。同様の記述が『男爵團琢磨傳　下巻』[*23]『艸居庵記』[*24] 箒庵高橋義雄『趣味ぶくろ』[*25]、「葉山、雀の宿病魯堂老の茶」『日本之茶道』[*26] にもある。よって、葉山の草庵は、大正 12 年（1923）には存在していたことが証明される。

しかしながら、これらの文中に庵名は記されていない。庵名が記されているのは高橋箒庵『大正茶道記』の「新年魯堂　大正十四年一月十六日」[*27] である。そこには次のように書かれている。前年は、多くの茶会が開かれたが、新年の初会は思いがけず葉山の仰木魯堂から案内が来た。1 月 16 日の正午に間に合うように、午前 10 時に東京駅より逗子行きの汽車に岩原謙三、田中親美、梅澤鶴叟、山澄清斎、竹内竹有と乗車し、逗子駅より乗合自動車で魯堂の草庵に到着した。以下に草庵の位置と庵名「魯堂」が記してあるので引用する。

> 海岸寄りなる森戸神社の入り口より十数歩右手に小形の冠木門（かぶきもん）あり、門を入れば小松の林立する間に百姓家然たる一構あるのが即ち魯堂で、入り口は広き土間となり、其一方の通縁（とおりえん）の上に根来塗楕円形で一見松花堂風の魯堂二字額が掛かつてあつた。（下線稿者）[*28]

これより葉山の草庵の所在地が森戸神社境内であり、庵名が「魯堂」であることがわかる。また、高橋義雄『趣味ぶくろ』にも草庵「魯堂」に関わる記述がある。昭和 10 年（1935）正月に詠まれた歌である。[*29]

> 新年葉山の魯堂にてよめる
> あら玉の年のはじめの松風を
> 竹の葉山の庵に聞くかな　　（下線稿者）

歌中「葉山の魯堂」とは、草庵「魯堂」のことである。高橋箒庵が正月の祝いに葉山の草庵「魯堂」に招かれ、松籟を聴きながら茶を楽しんでいる様子が思い浮かべられる。

以上より「森戸の草庵」「葉山の魯堂」と記されるのは、草庵「魯堂」であるこ

と、建設場所は相州葉山の森戸神社境内（現神奈川県三浦郡葉山町堀内 1025）、成立年は、大正 12 年（1923）以前と推定される。

草庵「魯堂」での茶会の様子を再び高橋箒庵の「新年魯堂」『大正茶道記』*30 にみたい。草庵は、葉山の百姓家を移築し改造したものである。入り口に広い土間、「魯堂」の扁額が掲げられている通縁、丁斧目太柱と大炉のある六畳間に続く八畳間がある。六畳間を寄付として客人たちが用意された昆布湯を啜っていると、亭主魯堂が土間より出迎える。客人は一旦外に出て庭先より八畳間へ入る。ここでの新年を祝した食事が終わると八畳間と六畳間の襖を取り払い、濃茶が点てられた。侘びた風情にふさわしい茶会の演出に、高橋箒庵は「魯堂主人が其茶臘重なるに連れて漸く其衒気を去り、自然洒脱の境涯に達した其進歩の著るしきに感ぜざるを得ぬ。（中略）大侘茶会に出逢ひたる福運を謝し、午後三時半頃打ち連れて魯堂を退出した。」と記している。

魯堂は、体調を崩して以来、この草庵に過ごすようになり、晩年には「雀の宿」と称していた。*31

この草庵より歩いて行ける場所に、魯堂は 2 軒目の別荘を構えた。これが「山ノ別荘」（現加藤邸）である。

（3）「山ノ別荘」

魯堂が葉山に設けた 2 軒目の別荘で、写真①の撮影場所が「山ノ別荘」である。【図 6】場所は、神奈川県三浦郡葉山町堀ノ内 1280 番地、草庵「魯堂」から歩いて 10 分足らずの距離で静かな広い敷地に建てられた。『雲中庵茶会記』昭和 16 年（1941）2 月 1 日「葉山病兄見舞の茶」に建設中の別荘で濃茶を喫した様子が綴られている。*32 葉山で療養中の魯堂を見舞いに政斎は、丸岡耕園、田中親美、松永耳庵とともに草庵「魯堂」を訪ねた。食後、魯堂が「この山の手に去年秋より土地の百姓家を手に入れ移築中（下線稿者）」であるが、そこで一服差し上げたいと言うので、海岸通を巡って一同そこへ歩いて行った。政斎は「構想よく思いの外堂々たる建物　兄得意の設計である」さらに、日本建築の真髄である屋根組の美をもった外観であると賞賛している。内部には、八畳間、三畳の小間（茶室）と次の間としての十二畳敷（実際は 12 畳半）の広間があると記されている。建設中の別荘で、魯堂自ら濃茶を練って見舞いの客人たちをもてなした。このひとときを「茶友と膝を交え衰弱の顔にも𦼮こびは満ちていた」と政斎は述

懐している。

ここでは「山ノ別荘」との記述はないが、この山の手に移築中の百姓家がのちに「山ノ別荘」と呼ばれる葉山における2軒目の別荘であると判断される。また、この広間の畳縁が「高麗べり」であるとの記述から、写真①付け書院の間の畳縁に模様が確認されるため、魯堂が座しているのは、この広間であると思われる。

「山ノ別荘」の竣工年は、これまで昭和14年（1939）とされていたが、昭和16年（1941）において前述のように「去年の秋より」移築中と文中に記されているので、昭和15年（1940）以降であると考えられる。

また、昭和16年（1941）10月『日本之茶道』（松永）耳庵「侘茶人魯堂老逝く」において「葉山の舊廬に戻つて（中略）昨年出来たばかりの新宅に案内し、二畳の小間に窶れ釜を吊るして『喫茶去』を楽しみとしてゐた（下線稿者）」[*33]との記述がある。以上より「山ノ別荘」の竣工年は、昭和15年（1940）と確定してよいであろう。

この年は、魯堂が亡くなる前年であり、團琢磨、高橋箒庵もすでに他界している。高橋箒庵は、1軒目の草庵「魯堂」を訪ねているが、残念ながら「山ノ別荘」に来ることはできなかった。

「山ノ別荘」は、竣工後まもなく主を失った。昭和16年（1941）9月に魯堂が逝去し、その14年後の昭和30年（1955）より新たな家族の住まいとなった。主は、日本画家加藤栄三（1906〜1972）である。【図7】【図8】

加藤栄三は、明治39年（1906）8月20日岐阜市に生まれた。大正15年（1926）東京美術学校日本画科に入学。昭和6年（1931）卒業。同窓に東山魁夷、橋下明治らがいた。昭和25年（1950）に東京美術学校を昭和6年（1931）に卒業した各科の作家達14名でグループ「六窓会」を結成。大日本土木の遠藤健三氏の骨折りで、第一回六窓会（日本僑・高島屋一会場構成・吉村順三）が開かれた。メンバーは、日本画：加藤栄三、橋本明治、東山魁夷、山田申吾、洋画：伊勢正義、大貫松三、佐藤敬、須田寿彫刻：大須賀力、黒田嘉治、長沼孝三、野々村一男、彫金：内藤四郎、建築：吉村順三である。日本画家として活躍するなか、昭和30年（1955）3月、加藤49歳のときに千葉県市川市高石神より葉山へ転居した。それが「山ノ別荘」である。「新しい住居は、茶室建築家仰

葉山市，山ノ別荘の外観。

図 6
「葉山市、山ノ別荘の外観」
藤井喜三郎著『艸居庵記』昭和 45 年（1970）

葉山の屋敷を庭から臨む

図 7
「葉山の屋敷を庭から臨む」
『流離の灯　加藤栄三追想集』
平成 3 年（1991）

画室

図 8
「画室」
『流離の灯　加藤栄三追想集』
平成 3 年（1991）

木魯堂自ら設計した別邸で、吉田五十八、山口蓬春、岩田藤七らにより絶賛される。」と『流離の灯　加藤栄三追想集』[*34] 巻末の年譜に書かれている。

加藤は、この邸宅が仰木魯堂作と周知していた。加藤美保子夫人が茶の湯の先生であったこと、六窓会で一緒であった建築家吉村順三がこの転居のきっかけをもたらしのではないかと推測している。邸内には、題材となる鳥や鯉が飼われ、多くの来訪者を迎えて賑やかであった様子が人々の記憶に刻まれている。

加藤栄三・東一記念美術館（岐阜市　1991 年　設計：吉村順三）の落成記念に編まれた『流離の灯　加藤栄三追想集』の中で家屋に関する記述を抜粋する。

小川貞夫（弥生画廊社長）：「仰木魯堂名作の広間で奥様のお茶を頂戴し、栄三先生と数時間共有した空気。」「孤高の画人」[*35]

奥田元宋（日本画家）：「市川の家とは打って変わって丁度禅寺の書院風な大きな応接間があって、私はああこれで栄三さんも永久の住居が見付かって良かったあとしみじみ思ったものである。」「流離の人」[*36]

行田ハツエ（加藤家に茶の湯の稽古に通っていた女性）：「お家全体が茶室で、お室の中は花瓶、花かご、本と芸術品ばかりでございました。」「芸術家、実業家の来客の多いお宅でございました。静かなお屋敷の中に忙しく、また、きらびやかな美しさよりも地味な飾り気のない、洗練された動きでの毎日の見習いでございました。」「葉山のお家の思い出」[*37]

日本画科の後輩である高山辰雄は、加藤を慕って葉山の家を訪ねると「上がってゆけ　ごはんを食べてゆけ」と勧められた。[*38]

門下生たちは「夏の暑い盛りの八月に先生の御宅で何度か研究会をさせて頂きました。」[*39]

栄三の甥である加藤晋は、子供の頃に夏休みと冬休みを過ごした葉山の加藤邸について、家や庭の様子を懐かしく思い出して活写している。「ガラス戸を持たない広縁には、いつも柔らかい光とやさしい風があった。」[*40]

昭和 47 年（1972）5 月 24 日加藤は、自宅にて逝去。庭の柏の木に紐をかけての縊死であった。歿後、日本画家の奥村土牛は「返す返すもおしい人を失いました。」と涙を浮かべて遺族に語ったという。[*41]

栄三の娘北川由美子は、加藤氏が亡くなった後も毎年の命日にほぼ同じ顔ぶれ

の人々が葉山の家に集まり、19年経った今は、まるで同窓会のような明るい雰囲気になってきたと書いている。*42

美保子夫人は、「主人が十七年の間愛した葉山の苔庭に、今日も二羽の山鳩が仲良く何かをついばんでおります。少しばかり、小ぜわしく…。」と「あとがきにかえて」に記している。*43

「山ノ別荘」に魯堂が住まいしたのは、昭和15年（1940）からの一年あまりであるが、引き継いだ加藤家は改築を施しながらもその姿を保って大事に住まわれてきた。

4.　撮影時期

写真①の撮影場所は、魯堂が葉山に昭和15年（1940）に設けた「山ノ別荘」の広間である。撮影時期について、再び写真①説明書より検討していきたい。「蘭奢待（らんじゃたい）を聞かれる仰木魯堂先生。床の経巻は、原三渓氏が仰木先生のために写経して贈られた観音経。経巻の製作は田中親美氏。（葉山市、山ノ別荘の広間）」とある。

魯堂は、「山ノ別荘」の広間に座して蘭奢待という貴重な香を聞いている。この蘭奢待が贈られた経緯について『艸居庵記』で次のように語られている。

葉山で病床にある魯堂を松永耳庵、田中親美、式守蝸牛、仰木政斎が揃って見舞いにきた時に、式守が秘蔵の名香、蘭奢待を持参した。それに感激した魯堂が号泣し、見舞客もともにもらい泣きをした。藤井は、魯堂が声を上げて泣く姿を初めて見たとのことである。「身を清め衣服をあらためられた仰木魯堂先生は、焚かれた蘭奢待を押しいただいて、心ゆくまで聞香なさった」*44 この姿を藤井が写真におさめたとのことである。蘭奢待とは、東大寺正倉院御物であり、その名に「東大寺」の文字が伏されている名香中の名香である。「その蘭奢待をもって見舞い、見舞われるおしあわせな交情の図は、おそばにあって一幅の絵を拝見するような心地がしたもので御座います。」*45 と綴られている。

この日のことと思われる記述が『雲中庵茶会記』にある。「葉山静養魯堂を見舞　昭和十六年七月十七日」*46 である。政斎は、松永耳庵とともに「森戸の住い」つまり森戸の草庵「魯堂」を訪ねたが、魯堂は、東京から見舞いに来た式守蝸牛、田中親美とともに「山の住い」にいるとのことで二人もそこへ向かった。

この日は、亡き母の命日でもあるので、魯堂は式守は魯堂に頼まれていた蘭奢待を持参した。床の間には、「鎌倉期十一面観音像」の軸が掛けられ、下には原三渓が写経し、田中親美が装丁した経巻と魯堂が写経した経巻が飾られていた。式守によって東大寺香の儀が行われ、観音像に香が供えられた。一同その香を聞き、二畳の小間で茶を喫した。その後「浜辺雀の宿」へ帰り、さらに濃茶を客人たちに出している。この移動を考えると写真①は、当日よりも、それ以後に撮影された可能性が高い。

写真①と同種の写真が初めて出版物に掲載されたと思われるのは、雑誌『日本の茶道』昭和 16 年（1941）10 月号*[47] である。本号は、9 月に亡くなった魯堂への追悼として耳叟こと松永耳庵による「葉山、雀の宿病魯堂老の茶」、耳庵「侘茶人魯堂老逝く」、光夢生「仰木老小傳」が掲載されている。*[48] 魯堂が亡くなる前の 2 ヶ月前後、昭和 16 年（1941）7 月～9 月に撮影された写真①がその肖像として掲載されたのである。

5.　掛け軸と経巻

写真①に写る床の間には、一幅の軸と経巻が置かれている。この説明書として前掲『日本の茶道』では「観音像の前に名木を聞く魯堂老」、『艸居庵記』ではもう少し詳しく「蘭奢待（らんじゃたい）を聞かれる仰木魯堂先生。床の経巻は、原三渓氏が仰木先生のために写経して贈られた観音経。経巻の製作は田中親美氏。（葉山市、山ノ別荘の広間）」とある。『雲中庵茶会記』昭和 16 年（1941）7 月 17 日「葉山静養魯堂を見舞（ママ）」の記述と合わせて、掛け軸と経巻について検討したい。

経巻について「原三渓翁と親美翁の写経普門品各一巻及び魯堂写経中の巻三巻を飾り」*[49] との記述がある。「写経普門品」とはすなわち「観世音菩薩普門品」つまり観音経のことである。

原三渓（本名：富太郎　1868～1939）は、昭和 14 年（1939）に他界しているため、それ以前に魯堂に贈られた経巻である。茶人である原三渓は、魯堂を高く評価していた。魯堂も造営に関わった箱根白雲洞を益田鈍翁より託されたことで二人の絆はより深まった。魯堂は、亡くなった原三渓のために追福の茶会を催した。

図 9
「藤原時代　地蔵像」
『歩鰲庵所蔵品入札目録　毛くろく』
昭和 12 年（1937）

図 10
東京都文京区音羽護国寺　仰木家墓所
平成 29 年（2017）撮影

昭和十四年九月二十一日　三渓追福の茶　仰木魯堂催

奥多摩にある仰木魯堂邸において三渓追福の茶会が行われた。

客　松永耳庵、田中親美、矢代幸雄、安田靫彦、小林古径、

前田青邨、川面義雄、縣治朗、中村好古、仰木政斎 *50

この時、床の間には「(藤原)公任　下絵朗詠」が掛けられ、「三渓筆　魯堂長寿を祝ふ願経を飾る」(「願経」とは、祈りをこめて写経された経文)とある。これが写真①の観音経の一つと同じものではないかと推測される。

原三渓は、昭和10年(1935)頃から関係者に、写経した経巻を贈っている。*51 例えば、昭和10年(1935)3月12日に團琢磨追福のための観音経、同年4月14日には中村房次郎に無難息災祈願のための観音経を贈っている。料紙は、田中親美に作成させ、金具などは、平家納経の金具を模写させて、平家納経と同じような仕立てとなっており、見事な巻物である。

次に『雲中庵茶会記』に書かれた「魯堂写経中の巻」について述べる。これは、「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」*52 ではないかと推測する。田中親美が手がけた華麗な料紙に魯堂によって法華普門品が謹書されている。この「妙法蓮華経観世音菩薩普門品」の刊記に「観音経料紙　十一張　壹巻　為仰木家追福製之　昭和十六年五月十七日　菅原親美」と経緯が記されている。田中親美が大正9年(1920)に厳島神社の平家納経の修復と複製を担当したのであるが、その写しとしてこの料紙を作っている。

床の間に飾られた観音経に合わせて、「鎌倉期十一面観音像」の軸が掛けられていると政斎は記しているが、これは「藤原期　十一面観音像」であると考えられる。それは、魯堂が昭和12年(1937)に行った売り立の目録『歩鰲庵所蔵品入札目録　毛くろく』*53 に載せられた掛け軸「藤原時代　地蔵尊」【図9】より判断される。

藤原時代の掛け軸「地蔵尊」(着色　竪 三尺二分 巾 一尺二寸六分)は、「毛くろく」の第二番目に掲載されている。第一番目は、藤原時代の掛け軸「孔雀明王」(着色　東大寺眞言院傳来　竪 三尺九寸二分 巾　二尺七分)である。

「地蔵尊」は、「十一面観音像」と同様、光背が放射状に描かれるという特徴

的な表現形式が用いられており、軸装も同種と判断される。よって、この「地蔵尊」は、「十一面観音像」を本尊とした場合の左幅となる。つまり、本来は、この「十一面観音像」を本尊として両脇に地蔵尊を配した三幅対の掛け軸であったと推測される。

仰木家の菩提寺は、護国寺で真言宗豊山派、本尊が如意輪観世音菩薩である。いわゆる観音信仰である。東京都文京区音羽護国寺の墓所には、埋経塚と奥の祠には、十一面観音像が建立されている。【図 10】

魯堂は、十一面観世音菩薩を本尊として両脇に地蔵菩薩を配した三幅対の掛け軸のうち、最後まで所有していたのが、この「十一面観音像」であったと考えられる。

経巻を贈った原三渓と魯堂の結びつきの強さを物語る写真がもう 1 枚ある。それが写真⑤である。横たわる魯堂の枕元に佇む生涯の友田中親美。魯堂が團家の「普請奉行」であるならば田中親美は「美術鑑定家」であった。二人の傍に活けられた蓮の花。原家よりの見舞いである。三渓園の池に朝咲いた蓮の華が届けられた。魯堂は「さすがは、原家の心づくし」[*54] と感銘し、親美と共に愛でたとのことである。

魯堂最後の日々を「森戸の草庵」に過ごし、ここに生涯を閉じた。[*55]

むすび

昭和 15 年（1940）において魯堂は、東京千駄ヶ谷原宿の本宅と別荘を 4 軒（奥多摩 2 軒、葉山 2 軒）所有していた。原宿の本邸と葉山「森戸の草庵（魯堂）」を行き来していたが、昭和 15 年（1940）春に原宿の本邸を人に譲り、葉山で独り住まいを始めることとした。[*56] そのため、美代夫人のために土蔵付きの家を原宿穏田に新築した。[*57]

葉山では、「森戸の草庵」を「雀の宿」と称し、翌昭和 16 年（1941）に「山ノ別荘」を新たに設けた。これが魯堂の遺作となった。魯堂は「雀の宿」を自宅とし、「山ノ別荘」は、客人をもてなす場として、あるいは、最後の茶三昧の日々のために作られたものであろう。

本稿は、新たな魯堂の肖像写真を提供されたことを契機として、これまで魯堂の肖像写真として最も認知されていたものを中心として考察した。その結果、人物像としては茶人としての交友関係、建築家としては、その遺作について言及することができた。

建築家としても茶人としても近代茶の湯の世界に多くの足跡を残した魯堂。追悼の茶会も音羽護国寺で盛大に催された。*58

次稿では、魯堂の追善茶会を中心として、音羽護国寺での建築家としての業績について論じていきたいと思う。

謝辞

本稿を書くにあたり、多くの方々にお世話になりました。仰木源太郎令孫仰木元二様、仰木道子様、吉田浩之様（中間市教育委員会生涯学習課）、浦塚省二様（なかまハーモニーホール館長）、『雲中庵茶会記』を快く貸与いただいた田中仙堂大日本茶道学会会長に深く御礼申し上げます。

注

*1 岡山理香「仰木魯堂の生涯について　－上京から仰木建築事務所設立までの経緯を中心として－」『茶の湯文化学』2017年9月

*2 藤井喜三郎『艸居庵記』私家版　1970年

*3 高橋箒庵『茶道本山記』　編者栗田天青　発行者三尾邦三　1938年

*4 前掲書2

*5 『日本之茶道』108巻10号　日本之茶道社　1941年

*6 中村昌生「仰木魯堂の遺構」『茶室のある邸宅』中村昌生編　毎日新聞社　1995年　166頁　葉山町の別邸に、ある日、式守蝸牛が持参した名香蘭奢待を松永耳庵とともに聞香している時、魯堂に命じられて藤井喜三郎が撮影したとある。撮影時期については特定されていない。

*7 前掲書3　100頁

*8 前掲書1　14-15頁

*9 仰木政斎『雲中庵茶会記　戦前・戦中』編輯　発行者味岡敏雄　非売品　1997年

*10 高橋箒庵『昭和茶道記　一二』編者熊倉功夫　淡交社　2002年

*11 「(七)點茶の稽古」『男爵團琢磨傳　下巻』故團男爵傳記編纂委員會　非売品　1938年　372-373頁

*12 前掲書9「耳庵翁魯堂見舞の茶　四月二日」336-337頁

*13 前掲書9、仰木政斎『雲中庵茶会記　戦後』編輯　発行者味岡敏雄　非売品　1997年

*14 松永安左エ門『茶道三年　上中下』粟田有声編　出版社飯泉甚兵衛　1938年

*15 耳庵「祥雲寺の魯堂忌」前掲書5　109巻11号　1941年　58頁

*16 音羽護国寺における不老門、多宝塔、茶室群の造営は、魯堂の最も重要な業績である。茶室群の現況など、すでに藤井喜三郎令孫建築家藤井直人氏、音羽護国寺伊澤元祐氏に資料の提供、多くのご教示をいただいている。今後、稿を改めて述べていきたいと思う。

*17 中村昌生「仰木魯堂の遺構」『茶室のある邸宅』中村昌生編　毎日新聞社　1995年　166頁

*18 大正6(1917)年7月に侯爵岩倉具定・伯爵金子堅太郎・子爵井上毅の各別荘は、買い上げられ、澄宮(すみのみや・現三笠宮)邸が大正8(1919)年6月に竣工した。その後、葉山御用邸付属邸となり、昭和62(1987)年6月3日に、「葉山しおさい公園」として開園した。面積は18009.28㎡(約5500坪)ある。

*19 『男爵團琢磨傳　下巻』故團男爵傳記編纂委員會　非売品　1938年　273頁

*20 前掲書2　51頁

*21 前掲書2　53頁

*22 高橋箒庵「竹有庵名残　大正十三年九月二十二日」『大正茶道記　二』校注者熊倉功夫／原田茂弘　淡交社　1991年　670頁

*23 前掲書19　392-393頁

*24 前掲書2　53-54頁

*25 高橋義雄『趣味ぶくろ』秋豊園出版部　1938年　462-463頁

*26 前掲書5「葉山、雀の宿病魯堂老の茶」53頁

*27 高橋箒庵「新年魯堂　大正十四年一月十六日」『大正茶道記　三』13-15頁

*28 草庵に掲げられていた扁額「魯堂」の二文字は、聴雨杉孫七郎が魯堂に与えた書「魯堂」(『なごみ』五月号　1986年　淡交社5頁、42頁)から取られたものではないかと推測している。魯堂は、大正2年(1913)東京平河町の杉邸に大書院と茶室「古鐘庵」を完成させている。この扁額は、所在が不明のためその証明は今後の課題としたい。

*29 前掲書25　359頁

*30 前掲書27

*31 前掲書5「葉山、雀の宿病魯堂老の茶　耳叟」53-54頁

*32 前掲書9「葉山病兄見舞の茶」314-315頁

＊33　前掲書５「侘茶人魯堂老逝く　耳庵」56 頁
＊34　『流離の灯　加藤栄三追想集』加藤栄三追想集刊行委員会　美術年鑑社　1991 年
＊35　前掲書 34　39 頁
＊36　前掲書 34　42 頁
＊37　前掲書 34　77-79 頁
＊38　前掲書 34「明るく静かな」116 頁
＊39　前掲書 34「楽しく厳しい日々」250 頁
＊40　前掲書 34「夢のつづき」266-270 頁
＊41　前掲書 34　12 頁
＊42　前掲書 34「父の想い、父の祈り」291-295 頁
＊43　前掲書 34　365 頁
＊44　前掲書２　105 頁
＊45　前掲書２　105 頁
＊46　前掲書９「葉山静養魯堂を見舞　昭和十六年七月十七日」357-359 頁
＊47　前掲書５　54 頁
＊48　前掲書５　53-58 頁
＊49　前掲書９「葉山静養魯堂を見舞　昭和十六年七月十七日」358 頁
＊50　齋藤清『原三渓　偉大な茶人の知られざる真相』淡交社　2014 年　342 頁
＊51　前掲書 50　294 頁
＊52　「壷中の魯堂」『なごみ』五月号　1986 年　淡交社　18-19 頁
＊53　魯堂が所蔵品の一部を売り立に出したときの目録である。『歩鰲庵所蔵品入札目録　毛くろく』には、入札 210 点、雑売 209 点の合計 419 点という膨大な品数が載せられている。売り立は、昭和 12（1937）年 4 月 23 日に特別下見、24、25 日下見、26 日入札並びに開札という日程で行われた。東京美術倶楽部が改築中のためその出張所として日本橋の喜可久（旧日本橋区茅場町 1-28）が会場となった。札元は、東京の中村好古堂、山澄商店、水戸幸商店、八田富雄といった魯堂との関わりのある道具商であった。京都からは土橋永昌堂、林新助が入っている。
＊54　前掲書２　104 頁
＊55　拙稿（＊前掲書 1）25 頁「葉山森戸の穏田美代宅にて静養することとなった。」という記述は誤りである。『雲中庵茶会記』（＊９）303 頁にある「穏田美代さんの夜会」を人名と誤ってしまった。「穏田」とは原宿にある地名で、「美代」は魯堂夫人仰木美代である。本稿で引用している仰木政斎著『雲中庵茶会記』（＊ 9,13）は、まだ翻刻が出ていないため、稿者の読み下しに不安な箇所もあり、各分野からのご指摘を請う次第である。今後も精進し、誤りがあれば改めていく所存である。
＊56　前掲書９　287 頁
＊57　前掲書９　303 頁
＊58　前掲書９　407-408 頁、前掲書１　25 頁、「仰木魯堂翁追善茶會　會記」（昭和 17 年（1942）9 月 20 日）横井半三郎（号：夜雨）旧蔵の茶会記を令孫斎藤和子氏より、平成 27 年（2015）稿者研究室に寄贈いただいた。會記には、夜雨の書き込みがあり、当日出席したことが伺える。